

キャンプ場にて

デフレだ、不況がくる等と、さわがれているかと思うと、一方では、夏の声をきくか、きかぬ中に、交通公社のキャンプの申し込みは、満員になっている。

エチケツト、エチケツトと、あれ程、云われているのに、エチケツトを守っているのは、汽車にも、電車にも乗れない。女性よ、たくましくあれ」と、五尺四寸に物を云わせて、とびこんだ車中の座席は、既に、筋骨たくましく男性が、九十八%を占めている。

「レデー・ファスト、恐妻家等と、終戦



後は女性に圧迫され続けで」と、なげいて男性のせめてものはらいせなのであるうか。

静かな、湖のほとりを想像していたが山中湖畔のメインストリートはバスの砂ぼこりが、二間先をさえぎる。都会の黄塵をはらいおとし、素朴な人間にかえることを目的に、山の中のキャンプ場にくるのだろうと思っただら……。

「おや、之が、日本人かいな」と、改めて目をこすって、見直し度い様な女性が、マリリン・モンロウばりに、カッ歩

秋山ちえ子

する。

一つ、一つとりたててみると、何と矛盾だらけの世の中だろうと、啞然とせざるを得ない。

商魂たくましい業者達は、海拔九百八十二米と云う富士山麓山中湖のほとりに、十五のキャンプ場を経営し、夏の四十日の間に、一年分のかせぎをしなくてはと、懸命である。

場末の町に見られる様な食堂がある。売店が並んでいる。貸ボート、貸ヨットは、まだいいとして、躰雀、ダンスホー

ル、パチンコやに至っては、こちらがはずかしい。

それに、キャンプと云えば、テントを張って、山の中から、枯枝を集め、飯盒で、御飯をたいて、ふだん、都会で出来ない原始的な生活の妙味を、たのしむのだろうと思っていると、大間違いで、厚い布地のテントは、ほんの数える程で、パンガローとよぶ、犬小屋を大きくした様なものが、松林のあちこちに、チョココンとおいてあったり、急場しのぎに、板をぶっつけたと云った感じの小屋が多く、いかにもお粗末である。

枯枝を集めなくても、貸石油コンロがあるし、谷川の水をくみにいかなくても、栓をねじれば、水は、都会と同じ様に、「ジャー」と出てくる。

炊事は、勝手にされると危いからと云うので炊事場がつけられていて。之では、アパートの炊事場と変りがない。

この様に、到れり、つくせりのキャンプ場が多い様である。

私は、一年に一度のキャンプ生活では自然にさからわぬ生活をしてほしいと思っている。火打石で、火をつける位に考えてほしい。

炊事のあとの火の仕末をきちんとしないと、山火事の様な大事になることを、各自がよく知って、小さいながら責任ある生活をするからこそ、自然を理解し、自然に、愛着を抱く第一歩ではないかと思うのに、お若い方々は、余りにも、不自由がきらいの様である。

夕暮のキャンプ場は、さすがに、人の心も、しっとりとした落つきが漂ってくる。

派手やかなものより、落葉松のすくとのびた姿や、野鳥の声、あざみの花等が、大きく浮びあがってくる。

パンガローにも、ポツポツと、住人の影がふえてくる様である。

多種多様の顔ぶれである。

男三人、女二人づれの、パンガローを

のぞくと、せまい、むっとする部屋の中に、皆が、ごろりとねそべっていた。

部屋の片隅には、カラになった一升瓶やら、ウイスキーの瓶、それに、缶詰のあきかんがころがっている。

ゆであずきのたべさしの缶に、さじが、つっこみばなしになっていて、いかにも自堕落な感じである。

「どちらからきましたか」と、声をかけたら、一斉に皆が、かま首をもちあげる様にして、私を見た。

「沼津ですよ」

男の中の一人が答えたが、云い終らぬ中に、黄色のワンピースの女が、クルリとおきあがって、今、口を聞いた男を、指先で強くつついた。

そして、私の方に背をむけて、膝をくんでいた。

「何も云うまいぞ」と云った、ふてぶてしい態度であった。

洗い場にいた高校の一年と云う三人の女の生徒に、「お母さんの許可を得てき

ましたか」と聞いたら「ええ」と云った。

その「ええ」は、余りすっきりした「ええ」ではなかった。そして、そばにいた若い男に、何かかまわれると、ハツとする様な、女臭い媚態をみせるのだ。

キャンプにきていると、一種特別の、解放感や、近親感が湧いてくるものだが、それも健全なものなら、ほほえましいが、彼女等には大丈夫だろうか、案じられるものがある。

陰性の感じのグループの話が先に出てしまつたが、数から云うと、明朗な、元気のいい、グループの方が多い様である。

茨城県の高校三年の四人の男の子は、夏のキャンプにきたくて、鶏を三十羽飼つて、卵の売りあげをためたり、兄弟七人からカンパをしてくたりと資金調達に苦勞した話をしていた。

そして、無器用な手つきで、カレーライスをつくつてたのしそつた。

東京の女子大生六人は、高校時代からの友達で、家でもころよく許してくれたと云つていた。

彼女等は、私をそつちのけにして、計算をはじめぬ。

「××さんは、お菓子を買二十円分買ったのね。缶詰の人は誰？ ○○ちゃん、佃煮、百五円」等と、誰も損をしない様に、平等の支出にしなければと、ガツチリしたところを見せていた。

或グループでは、男性側が、女性側に圧倒されて、薪あつめ、御飯たき、おかずづくり一切をさせられることになつたと、うれしそうに悲鳴をあげていた。

夕食のひとさわががすみ、夜がくる。夜のキャンプ場は、キャンプ・ファイアーをかこんで、昼とは全く趣を異にした生活がくりひろげられる。

歌を歌っている人々が一番多かつたが、私は、次々に歌っているグループを廻つてみたあとで、たまらないさびしさを感じた。

つい先頃、ソ聯に長く生活して帰つてこられた人から聞いた話を思い出したのである。

ソ聯の田舎で、水を汲みにきた女の人達が、思わず口ずさむ歌声が、立派な二部合唱になっていて、その人は、仕事を忘れて、ききほれたと云つていた。

それからまた、雪の降る日、仕事をしていたら、むこうの町角から、レコードで聞いていたと同じ様なドンコザックの合唱がきこえてきたと云うのだ。窓をあけて、体をのり出してみると、軍隊の行進であつた。バリトン、テノール、バスと、調和された歌声が、夜のとばりにつつまれた町にひびき、何とも云えぬ雰囲気をつくり出していた。その人は、夢中になって二階からかけおりて、軍隊の一番あとから、そのコーラスにひかれて、夜の雪道を歩きつづけたと云う話である。

外国人の声は、体格とか、食事等の關係で、ヴォリウムがあり、美しい。

日本人の声は、昔から、わびとか、さびを尊ぶ国だけあって、何となく、四畳半的であり、一人でひそかにたのしむのをよしとする習慣がある。

それに、日本は、特定の人以外は、音楽を尊重しない国である。特に、男が、歌を歌ったり、音楽を好む等と云うと、男らしくないと軽蔑された国であった。

キャンプ・ファイアーをかこんだ中学生の一群は、はじめは、それでも「卯の花の匂う垣根に……」等と歌っていたが、二つ、三つで、歌は途絶えてしまう。

そうすると、豪傑連中が、
「炭坑節」
「酋長の娘」
「やっとなん節」
「芸者ワルツ」等と、思いもかけぬものまで、とび出してくる仕末であった。しかも、テレかくしもあるせいか、パン声をはりあげて、がなるのである。

先生は、手をこまねいて、見ているだけで、どうにもならない。

私は絵を描くことも出来たり、歌を歌うことが出来る人生は、この上なくたの

しいものだと思ふのであるが、キャンプにきている中学生を見てみると、之は全く夢物語の様に思えてくるのである。

幼い頃から、子供達にもっと正しい発声法を教え、大人になっても、美しいコーラスが出来る様に、特に男の子の上に、指導があつてほしいと願わずには居られなかつた。

もう批判はやめようと、私は、人気のない林の奥に入つて行つた。

静かな高原の気配が、足もとからにじりよる様であつた。

月夜だったので、から松の姿が、一きわ、すつきりと見えた。

落葉松の林を過ぎて

落葉松をしみじみと見き

落葉松はさびしかりけり

たびゆくはさびしかりけり

久しぶりに、白秋の詩を、心から口ず

さんでみたくなつた。

落葉松はさびしかりけり

旅ゆくはさびしかりけり……と。

大人の私まで、この様に心を素直にさせてくれる大自然のよき、キャンプ生活の楽しさを、日本中の若い人々に、一度は経験させてやりたいものだ、しみじみ思つた。それには、条件がある。

日本中の若い人々等と云い出すと、何と云つても日本の国民の、貧しさからの解放であるが、それはひとまず政治家にまかせて、身近なことから考えてみたい。

まず、親も子も、納得いく様な方法や、話しあいが必要ではない。

次に、しっかりとした指導者がついていくこと、良心的な管理者のいるキャンプ場をえらばなければいけないと云うことである。

或母親は、こう云つた。

「私は、娘が、キャンプにお友達だけはいくと云うことを聞いた時反対でした。ところが、一寸それを云うと、娘は」お

父さんも、お母さんも、私をそんなに信用出来ないのかしら。○○さんの家では、すぐ、いいと云ったのに、うちでは一言でだめ。

若い者の自由を認めない、封建的な家庭なんだわ」と、泣かれたり、理屈を云われるやらで、とうとうまけてしまいました」と。

母親は、〃古い〃とか、封建的だと云われるのを、極度におそれている様な傾向がある。

「うちのお母さんは、物のわかりがいい」と、ほめられたい様である。

ところが、それが、応々にして、自由も、自由、野放図の自由になってしまい、後悔先にたたずと云った結果を生むこともある。

私は、母親は、人生の経験者として、未経験者の子供に、注意を与えるのは、当然の義務であると思っている。

誰だか知らない人と、娘がキャンプに行くとき、「行っていらっしやい」

と云う様な母親は、母親としての資格がないと思っっている。

「責任者や、指導者の方、それと、一緒に出かけるお友達に、一応おあいしてから、きめましょうね」と云える位、母親は凜としていなければいけないと思う。

母も子も、充分に理解が出来「さあ、

気持よく行ってらっしやい」と、送り出された子供達は、心から、キャンプ生活のたのしさを味わい、大自然に抱かれて、一生思い出として残る生活をしていくことが出来るのではなからうか。

(NHK婦人の時間担当)

ねれねれよ——おころりよ

坊やはよい子だ ねんねしな

坊やがねた間にべゝたって

お眠が醒めたら官参り

お宮の鳩には豆遣って

お池の金魚にや麩を遣って

坊やはよい子だ ねんねしな

——神奈川県児童童子守唄より——